第２章　阿仁マタギ習俗の概要

Ⅰ　阿仁地方の歴史的地理的風土

調査委員　湊　　正俊

１　はじめに

秋田の中央山岳地帯に位置する阿仁川流域は、古くは下流域を榲淵（すぎぶち）といい、上流域を小アニ・大アニといっていた。「阿仁」の地名が文字記録に残っているのは、天正19年（1591）、「豊臣秀吉朱印安堵状」の写しとある。

「アニ」は蝦夷ことば「アンニ」から転訛し、木立の茂る様を表している。地名・場所名に笑内（おかしない）、比立内（ひたちない）、戸鳥内（とりない）などナイや、申沢（さんじや）、沢抜（じやぬけ）などジヤ、天狗又（てごのまだ）、杉又、高倉などの地名が多く昭和初期までマタギことばなど、蝦夷ことばの転訛らしいものが使われていた。

マタギの語源については、山立の転訛説、又鬼、盤司盤三郎（ばんじばんざぶろう）（万二万三郎）伝説、サンスクリット語（梵語）説まで諸説が紹介されているが、阿仁では体力気力が優れ、高峰渓谷を跋渉して狩猟生活する仲間衆をいった。山の神を信仰し、万二万三郎を始祖として、規範を重んじ習俗文化を伝承する村社会の構成員として認め合ってきた。

２　地理的風土

阿仁川は米代川支流の最大河川であり、旧合川町李岱付近で西の小渓小阿仁川と東の大渓大阿仁川が合流して、清烈で豊富な水量を注ぎ日本海に続いている。坂上田村麻呂の北方経営、阿倍比羅夫北征時代から、阿仁鉱山隆盛時代までの船運送の重要河川であった。木材資源や粗金は下荷、食糧や生活必需品は上荷でにぎわった。

大阿仁川の上流は、森吉山麓北東面を流れる小又川と南西面を流れる大又川が阿仁前田地区で合流している。阿仁川の源流は国土地理院地図によれば、大又川上流の打当川岩井ノ又地点となっている。

阿仁マタギの里は、三つの大きな山塊の渓谷段丘地にある。一つは鹿角・八幡平と続く森吉山塊で、奥岳（1454㍍）を中心に前岳（1308㍍）、割沢森（1025㍍）掬森（ぶなもり）（1015㍍）その他千メートル級の外輪山の滝水を集める打当川流域が打当マタギの里。

仙北・田沢、河辺・雄和と背合せする大仏山塊（1167㍍）の峰々、万内森（823㍍）、赤倉山（772㍍）、大覚野の冷水、秋田太平山陸塊の北端白子森（1179㍍）、金池森（967㍍）他の峰々の湧水を集める比立内川と打当川の合流点が比立内マタギの里。この二流の合流点が、大又川の起点とされている。

大又川水系は、溶結凝灰岩、凝灰泥板岩、礫（れき）岩などの凝灰岩質、火山噴出岩（グリーン・タフ）の層が岩盤を構成している。垂直的亀裂・浸食が激しく、断崖絶壁が続き飛沫を上げる激流が続く。根烈岳（835㍍）、三枚平山（931㍍）、姫ヶ嶽（651㍍）などの滝水が、笑内で鳥坂川、萱草地区で根子川が流入して、七曲トンネル下の峡谷を過ぎると、荒瀬・阿仁鉱山地帯となっている。瀬音が静かになって、約20数キロの激流が終わる。この根子川の上細流と峰々に囲まれたすり鉢状の段丘地がマタギ発祥地伝説の里、根子マタギの里である。

急峻な峰々と樹枝状に渓谷をなした両岸段丘地に住みつき、必然的に狩猟採取生活に依存してきたが、これは隔絶された地理的環境による。生活形態や狩猟方法や活用、習俗文化などに相異があったと思われるが、佐竹藩政以後の交易交流によって、習俗文化等同一化されて、特殊性伝承を伝え得る人も少なくなった。

３　生態系と風土

夏季は高温多湿で植物の生育に適し、盛夏はうっそうと茂る大樹林、冷涼で過ごしやすいが11月上旬

より５月中旬の６か月間は寒冷降雪期で冬が長く県下でも豪雪地帯で知られる。里山が春到来で桜の季節を迎える頃、峰々の残雪と若芽・若葉の春景色となる。穴籠りの熊が出没する頃は熊の巻狩りで、日焼け顔のマタギ衆が活気づき、マタギ話しに花が咲く。植生は、紅葉落葉樹林帯、針・広葉混合林帯、高山植物帯からなっている。奥阿仁の原生林は椈（ぶな）・楢・栗・栃・胡桃・楓などの木の実。ヒメコ松（北五葉）・ねじこ（くろべ）・もろび（とど松）・山葡萄・あけび・またたび・くろもじ・タラの木他、蔓（つる）や低木・柴類の若芽や実が豊富であった。

落葉腐葉土の絨毯、湿原地帯、老木枯木、岩穴など小動物の捷息、子育て環境の適地であった、やまね・りす・ばんどり（むささび）・野兎・猿・山鳥などの草食動物、狐・てん・いたち・むじな（狸）・犬鷲・鷹など肉食動物、マミ（穴熊）・イタズ（月の輪熊）・アオシシ（かもしか）などの大型動物が山を駈け巡り、山野だけでなく家の周囲や屋根上まで、けものたちの足跡模様で冬景色を飾っていた。

短い春から初夏は、あざみ・山うど・ぼんな・しどけ・蕗・みずなどを集め塩漬け保存し、ぜんまい・わらびは干物として冬期間の食材準備に忙しく、お盆を過ぎると初秋はとびだけ・舞茸、そして晩秋にかけて多種類の広葉樹林枯木に発生する茸採取で原始的関心を呼び起こし、かのか茸の煮付け、熱いなめこ汁で冬を迎える。炎と煙の囲炉裏を囲み、焼栗や小粒のぶなぐりを頬張り耳を傾ける子供達の姿、強力マタギ老人が16貫（60　　）舞茸を水楢老木に発見し、背負って帰宅した話、熊を射止めた武勇伝を語る姿が懐かしい。

４　阿仁マタギ集落とくらし

阿仁マタギの紹介は、根子村肝煎（戊辰戦争の新組鉄砲方長）七之丞マタギの後裔・佐藤正夫氏により昭和10年（1935）に「又鬼の由来と熊狩りについて」（秋田放送局）と題してラジオ放送され、以後新聞・文筆家などの関心が高まった。昭和40年代、秋田県教育委員会による「狩猟習俗調査報告書」の刊行や、阿仁マタギ用具の県有形文化財指定がなされた。映像文化時代になり映画「マタギ」「イタズ」の撮影、テレビによる放映や情報誌で紹介されるようになった。

菅江真澄の紀行文『美香幣乃誉路臂（みかべのよろい）』、武藤鉄城の『秋田マタギ聞書』その他の著書で紹介されているが、『阿仁町史』第六章鉱山とマタギ・第二節マタギの習俗によりその概要を知ることができる。

根子マタギ

平家・源氏の落人伝説と民話の里、「根子番楽」（国指定重要無形民俗文化財）で知られる根子の語源は開発を意味すると言われる。この地からは縄文土器や石器が出土し、魚形文刻石（県指定有形文化財）など祖先がすり鉢状の地に生活を営んでいたことを伺わせる。

源氏落人説は、義経の家臣佐藤継信の末裔で頼朝の追手を逃れて阿仁に移り住んだという。根子番楽も源氏の武将舞が多く、住民意識も文武両道進取の気運に満ちている。

平家落人説は、壇ノ浦合戦に敗れた一族家臣らが離散したが、信州飯田に落着した一団が越後の三面（みおもて）、下野日光、羽後の根子に分かれたと言う。万二万三郎伝説、露熊マタギ岩、姫ヶ嶽マタギ犬、根子吊橋など伝説民話も豊富で歴史を感じさせられる。巻狩りの手法、山の神信仰と掟の遵守、シカリを中心にした組織行動など、集落形成にも影響している。

狩猟行動範囲も、渡りマタギとして日本海側の出羽山地、奥羽山脈を南下するなど、他国の狩猟行動に影響を与えた。秘巻「山立根本之巻（日光派）」「山達由来之事（高野派）」などの他、藩政時代からの記録文書も残されている。

比立内マタギの里

比立内は蝦夷語「ヒヒナイ」より出て小樺の茂る谷間の流れを意味し、館跡や奥阿仁では一番広い段丘地で狐台・松森台などから、石鏃、石錐（キリ）、皮剥（小刀）、石斧、石剣の一部が出土し、削り石

片の捨て場まであって祖先の生活がしのばれる。

越後三島郷の住人与助・市兵衛兄弟故あって郷里を去り、仙北郡西根村に住む。その頃西根村のマタギが狩に来て、赤井の沢で熊を射取り、展望するに田畑十万刈を起すによいと村人に伝え、与助・市兵衛によって開墾が始まった。(『大阿仁村発達史』より)。

マタギ集団は、比立内山子衆が中心で、長畑・幸屋・幸屋渡からも参加していた。

阿仁鉱山最盛期は、精錬用薪炭の生産地、仙北平野より飯米運搬中継点等で、農林業等労役作業主業であったが、戦中・戦後は広葉樹活用による木材工業が始まり、素材生産者は山小屋宿泊で伐採作業が行われた。昭和20年代には国土総合開発計画で阿仁・田沢が指定され、復興期から経済成長期にかけて森吉山麓・大仏山塊・白子森山塊の広葉樹林伐採が急激に進み、地理的環境に精通したマタギ衆は人材資源として活躍した。

残雪期には山おやじと呼ばれる組頭を中心に巻狩りが盛んに行われ、一冬に３～40頭の熊狩りがあったという。

集落自治会で山の神講中を組織し、12月12日を山の神祭礼日として巡回当番で拝礼、早朝若勢達は水ごりを取り無病息災と山の恵み享受を祈願した。

打当マタギ

森吉山塊を中心に行動したが、外輪山の他鹿角・八幡平、津軽、南部方面にまで旅マタギを主業とする人もいた。

豊臣一族の残党落人説の言い伝えがあり、石田、柴田、鈴木、泉（古くは和泉)、斉藤などの姓が多く、その真偽記録は不明である。

シカリ（頭領）中心の組織でマタギの一員となるためには、神社にお籠もりをして修業し実体験による訓練まであった。特に柴木を集めて小屋造りをし、数週間の宿泊狩猟までして生計をたてていたマタギもいたという。

伝説・民話も、森吉山の鬼、中村七不思議、悲恋安の滝物語などがあり、菅江真澄の紀行文にも山賤（やまがつ）（山中に住む、身分・地位の低い人）の家に宿をとり地域観察をした様が記されている。国指定天然記念物の桃洞・佐渡杉原生林（学術参考林)、立又渓谷、つぶ沼湿原など自然観察と熊牧場、遊々ガーデン（渓流遊び施設)、阿仁マタギ資料館、打当温泉マタギの湯など、阿仁の最終山麓部も昔のような僻村の面影も消えた。

阿仁マタギ魂と生き様を伝える、古老マタギも幽明境を異にされ、70歳代の健康と気概で活躍する習熟者に５～60歳代の気骨あるマタギ衆が巻狩りに参加する現状で、三地区ごとの若年後継者は４～５名程度となった。

今後ハンターという鉄砲撃ちは出ても、阿仁マタギ習俗文化の伝承者は数少ないと思われる。知識情報としてのマタギ文化でなく、生き様を伝承する何かを期待したいと思われる。

II　阿仁マタギ習俗の記録

調査委員　丸谷　仁美

1　はじめに

マタギ習俗については、近世以降、さまざまな研究や報告がされている。そのほとんどは狩猟文化に注目したもので、狩りの仕方やマタギの用いる山詞、しきたりなどについては膨大な記録がある。

そこでまず、阿仁マタギを中心に、今までの調査研究のあゆみ、阿仁マタギをとりまく環境が近世からどのように変化してきたかについて整理したい。

2　阿仁マタギについての研究史（表１）

江戸時代

菅江真澄

江戸時代のマタギ資料として、まず『菅江真澄遊覧記』が挙げられるだろう。

菅江真澄は江戸時代後期に、50年近くにもわたり東北地方を旅した人である。当時の人々の生活や風俗習慣を文章や図絵に詳細に記録しており、東北地方の江戸時代後期の人々のくらしを知る貴重な記録を数多く残している。

真澄は「小野のふるさと」「けふのせばのの」「十曲湖」「すすきのいでゆ」「みかべのよろひ」「筆のまにまに」の中でマタギについて記しており、特に「みかべのよろひ」では、実際に打当、比立内、笑内に立ち寄り、根子マタギについて記述している。

真澄は「小野のふるさと」（天明５年（1785））で既に、「またぎとは狩人（熊、ゐのしゝなどうちありくを、またきといふ）」と述べ（菅江　1971　246頁）、以後「またぎ」という言葉を用いている。真澄の関心は主に、マタギの外見などについて述べているが、享和２年（1802）頃に書かれた「十曲湖」から、山詞について特に関心を示すようになった。

真澄は、「山に入ては、それぞれに忌詞の多かりけると、それらが語りぬ」と述べ（菅江　1972　379頁）、山に入る時に、非日常の言葉が用いられること、また、これらの言葉の中には蝦夷詞や古い言語が用いられていることをたびたび指摘している（「みかべのよろひ」「筆のまにまに」）。

もうひとつ、真澄は「マタギ」の語源についても考察していることが特徴としてあげられる。

「筆のまにまに」（文化８年（1811）頃）という随筆の中で、真澄はマタギの語源について、かつて猟が禁じられていた時代、植物の級（マダ）を剥ぎに行くと言って山に入った、「級剥（マダハ）ぎ」が「マタギ」に変わったのではないかと述べている。これは、「十曲湖」での、「むかし田猟を禁制しける山に、しのびしのびに入て狩りしけるを木こり、級の皮剥ぎすとこたへぬ。さりけるときよりも狩人をなべてまだはぎといゆ」（菅江　1973　156頁）という記述を受けてのことと思われるが、このことが真澄独自の考えであったのか、当時から言い伝えられていたことなのかは定かではない。

このように、真澄はマタギの習俗だけでなく、マタギの使っていた言葉について関心の強かったことがうかがえる。このことは、真澄の関心が、マタギの習俗、言葉を通して「いにしへぶり」、日本の古い時代を探ろうとするところにあったからであると思われる。

表１　阿仁マタギについての研究史

阿仁マタギに関する文献		他地域マタギに関する文献		マタギに関する主な出来事	
		天明５年（1785）	「小野のふるさと」（菅江真澄）		
		天明５年（1785）	「けふのせばのの」（菅江真澄）		
		寛政１頃（1789）	「奥民図彙」（比良野貞彦）		
		享和３年（1803）	「すすきのいでゆ」（菅江真澄）		
文化２年（1805）	「みかべのよろひ」（菅江真澄）				
		文化４年（1807）	「十曲湖」（菅江真澄）		
		文政11年（1828）	「秋山紀行」（鈴木牧之）		
		天保６年（1835）	「北越雪譜」（鈴木牧之）		
		大正５年（1916）	「マタギと云ふ部落」（柳田國男）		
		大正15年（1926）	「山の人生」（柳田国男）		
		昭和８年（1933）	「雪と民俗　マタギ」『民俗学』（武藤鉄城）		
				昭和10年（1935）	山村生活調査地のひとつとして、秋田県北秋田郡荒瀬村に調査が入る
昭和11年（1936）	「積雪期における秋田マタギの生活とその印象」『ケルン』（高橋文太郎）				
昭和11年（1936）	「マタギの話」（武藤鉄城　秋田魁新報記事）				
		昭和12年（1937）	「山村生活の研究」（柳田國男編）		
昭和12年（1937）	『秋田マタギ資料』（高橋文太郎）				
昭和12年（1937）	「マタギの山言葉」（後藤興善　秋田魁新報記事）				
昭和12年（1937）	「阿仁またぎの山詞その他－秋田県北秋田郡阿仁合谷」『方言』7－1（早川孝太郎）				
		昭和17年（1942）	「「マタギ祝ひ」に就いて」『旅と伝説』15-12（金子總平）		
昭和18年（1943）	「秋田及び津軽のまたぎ聚落」『東北の村々』（山口弥一郎）				
昭和33年（1958）	「阿仁マタギに就いて(1)(2)」『出羽路4～5』（工藤由四郎）				
				昭和34年（1959）	「阿仁マタギ用具」126点 秋田県指定重要文化財（民俗資料）
昭和38年（1963）	「狩猟習俗調査（秋田）」（文化庁）				
昭和39年（1964）	『狩猟習俗調査報告書』（秋田県教育委員会）				
昭和42年（1967）	『秋田マタギと動物』（秋田魁新報）				
昭和44年（1969）	『秋田マタギ聞書』（武藤鉄城）	昭和44年（1969）	『狩猟伝承研究』（千葉徳爾）		
昭和45年（1970）	『阿仁マタギの習俗』（阿仁町教育委員会）				
				昭和51年（1976）	「マタギ」（矢口高雄）
		昭和53年（1978）	『マタギ狩猟用具』（太田祖電、高橋喜平）	昭和53年（1978）	岩手県碧祥寺「マタギの狩猟道具」486点 国指定文化財
昭和54年（1979）	『消えゆく山人の記録　マタギ』（太田雄治）				
				昭和57年（1982）	映画「マタギ」公開
				昭和57年（1982）	打当にふる里センターができる。マタギに関する資料も展示される。
昭和59年（1984）	『マタギ－日本の伝統狩人探訪記－』（戸川幸夫）			昭和62年（1987）	映画「イタズ」公開
昭和62年（1987）	『阿仁マタギ』（秋田魁新報連載）				
平成元年（1989）	『マタギを生業にした人たち』（野添憲治）				
				平成２年（1990）	打当に熊牧場開設
平成６年（1994）	『マタギ－森と狩人の記録』（田口洋美）				
				平成16年（2004）	根子番楽国指定民俗文化財
				平成17年（2005）	どぶろく特区

鈴木牧之

鈴木牧之は越後国塩沢（新潟県南魚沼市）の生まれで、家業は質屋と縮仲買を営んでいた。牧之は俳諧や書画をたしなみ、紀行文や随筆、俳句集などを残している。

「北越雪譜」は雪国での生活や風俗など、図絵を交えて紹介したものであり、40年かけて記した著作であるといわれている。

この中に、熊を捕りに来た「出羽あたりの猟師」のことについて述べている部分がある。

この猟師らは、越後の熊を狩に来ているが、越後の熊の胆が上品であるからという。５～７人で行動し、３～４匹の犬を連れている。獣の皮の衣を全身にまとっており、柄の長さ４尺ばかりの手槍、山刀を薙刀のように作ったもの、鉄砲、斧類などを持っており、道具も獣の皮を使って鞘にしていると述べている。

また、熊の捕り方について、罠をしかけ、大石を落として熊を圧死させる方法と、冬眠している穴から熊をおびき出したところを槍で突いて殺す方法との２通りについて、詳細に記している。

「秋山紀行」は、文政11年（1828)、牧之が平家の落人伝説の残る秋山郷（新潟県と長野の県境あたり）を旅し、その土地の風俗習慣などを記したものである。

この中で、牧之が秋山郷の湯本という場所に行った際、秋田の猟師が滞在している噂を湯守から聞く。牧之は猟師に興味を持ち、わざわざ約束をして猟師からさまざまな話を聞くのである。

牧之がここで出会った猟師は、「（羽州秋田）城下より三里隔たる山里」の出身であるという（鈴木　1969　417頁)。牧之は猟師より、猟や漁の仕方、また湯本から、猟師が行くという草津までの道のりについて尋ねている。

猟師は、湯本から草津までは、普通の人ではとても通ることができない、猟師たちのみ通れる道があること、獲物をとるには、夏はヒラという罠を仕掛け、動物を圧死させる方法があること、草津に着いたら魚を売るが、魚が不漁の際には獣を捕って売ることなどを牧之に話す。牧之は猟師にさまざまな質問をし、時には猟師の話を書き留めたりしながら熱心に聞いた。

この中で、興味深い点がある。この猟師は、秋田の城下より３里も離れた山里に住んでいながら、「秋田在の訛も交らず言葉鮮なれば、一つも繰返して聞直すこともなく」と牧之が記している点である（鈴木　1969　419頁)。この文章だけでは、猟師がどのような言葉を話したのかは分からないが、少なくてもなんらかの共通語を身につけていたことが分かり、猟師の知識の広さを感じさせる。

ただし、牧之は「マタギ」という言葉を用いず、「猟師」とのみ記している。「マタギ」という言葉は、先ほど挙げた菅江真澄の著作の他には、伊藤為憲「鹿角縁起」（天保七年（1836)）に、「狩人ヲ方言マタキと云」という記述があることと（伊藤　1971　370頁)、比良野貞彦「奥民図彙」（寛政元年（1789)）に、マタギを「股木」と書き表している部分がある（比良野　1973　136頁)。いずれにせよ、マタギという言葉はその土地でのみ使われていた言葉であることが分かる。

明治時代～昭和初期まで（～1945）

近世からマタギはさまざまな書物に登場するが、昭和初期から全国的に知名度も高くなり、マタギに関する調査研究が行われるようになっていく。

その背景には民俗学の祖である柳田國男がマタギに注目していた部分が大きいだろう。柳田は、明治42年（1909)、宮崎県椎葉村での狩猟習俗についてまとめた『後狩詞記』を発表して以来、山村の習俗や、狩猟に注目し、いくつかの論考を出す。マタギについても早くから注目しており、大正５年（1916）に出された「マタギと云ふ部落」では鹿角市大湯のマタギ集落を訪ね、マタギの語源について検証している。この時柳田は『菅江真澄遊覧記』や比良野貞彦「奥民図彙」を引用し、自身の大湯での調査内容などと比較検討している。

その後も柳田はマタギに関する論をしばしば発表するが、柳田自身は現地調査に重きをおいたという

よりも、地元の研究者や菅江真澄などの著作を引用した上で、そこから自身の論を展開している。

秋田県内でのマタギ習俗については、武藤鉄城が昭和３年頃から、仙北、由利、北秋田郡のマタギについて現地調査を行っており、昭和８年（1933）に「雪と民俗　マタギ」という論考を発表している。その後、武藤鉄城は継続してマタギに関する報告書を発表していく。

この、武藤鉄城がマタギの調査を行っていた昭和10年代前半には、県内外でもマタギ習俗についての論考が数多く出されている。昭和９年から12年にかけて、柳田國男の指導のもと、全国66か所の山村で、統一した質問項目を設け、生活調査が行われた。阿仁（旧荒瀬村）へは昭和10年に調査が入っている。こうした調査も、全国の研究者が阿仁マタギに注目するひとつの要因になったと思われる。また、このような調査が行われることの前提には、地元の研究者の調査活動なり、既出の報告書が大きな引き金になっているようである。

たとえば昭和12年（1937）、高橋文太郎が『秋田マタギ資料』をアチックミューゼアムから刊行するが、内容はその前年度、武藤鉄城と同行した時の内容によるものであるし、昭和17年（1942）、『旅と伝説』に発表された金子總平の「「マタギ祝ひ」に就いて」は、高橋文太郎の調査をもとに新たに調査を行ったものである。

この時期、さまざまな地域のマタギの狩りの仕方、マタギ言葉、集団での規則など、現在ではもう聞くことの出来ない貴重なマタギについての習俗が報告されている。このことは、山口弥一郎が昭和18年（1943）に「秋田及び津軽のまたぎ聚落」を発表した中で、「獲物が急減してくると到底またぎを主としては生活の維持が困難となり、開墾して農を主とするか、林業等に依存する様になり、またぎ作法の如き古い伝統は頓に衰へている」と述べたように（山口　1943　116頁）、近い将来マタギ習俗が変容していくことへの危惧、そしてマタギ文化を次世代へ伝えていくことを目的としてさまざまな論考が出されたのではないだろうか。さらに昭和10年（1935）、民俗学者折口信夫の推薦で、根子番楽が日比谷公会堂で行われた日本民俗芸能大会に参加、翌年は秩父宮夫妻に番楽を公開している。芸能面でも、根子集落が注目された年でもある（阿仁町　1992　584頁）。

これらの大部分は狩猟習俗が中心であるが、中にはマタギ集落での生活について注目したものもある。たとえば高橋文太郎は、明治期以降の根子集落について、「現在戸数八十余戸もあるほど、部落の人口も殖えてゐるが、この種の生業をもつ山間の部落としては大きいだけに、ある時期に他よりの文化を吸引することも亦鋭敏であった」と述べており（高橋　1936　７頁）、大正時代頃の好景気に売薬行商で高収入を得たことが、従来の村の習慣などを変えるきっかけともなったことを指摘している。高橋はその他にも、それまで省みられることの少なかった、集落の女性たちに目を向け、田の堆肥運びや薪採り、山のワラビ、ゼンマイ採取等が女性の仕事であることを述べ、男女の役割分担にも注目している。（高橋　1937　26頁）。このように、狩猟文化のみならず、マタギ集落そのものに目を向ける傾向も、少なからずあったと思われる。

終戦後（1945年～）

戦後、阿仁マタギをはじめ、マタギ集落に新しい流れが生まれる。それまでは一種の秘境のように思われていたマタギ集落が、交通の便がよくなり行きやすくなったこと、またラジオ放送などによって、マタギがより広く知られるようになり、マタギの習俗や集落そのものにも興味がもたれるようになった。

同時に、昭和20～30年代を境に、急速に失われていくマタギ習俗を保護しようという動きが生まれる。

昭和34年（1959）、「阿仁マタギ用具」126点が秋田県指定有形民俗文化財に指定される。それにともない、昭和39年（1964）、秋田県教育委員会は『狩猟習俗調査報告書』を発行した。その中にはマタギ言葉や熊狩りの仕方、巻物の翻刻など、今までの研究成果もふまえた詳細な報告書となっている。そして昭和44年（1969）、武藤鉄城の没後ようやく『秋田マタギ聞き書き』が発行された。平成元年（1989）に出された、『日本民俗文化資料集成一巻　サンカとマタギ』の後書きには、高橋文太郎と武藤鉄城のマタ

ギ資料について当時の様子を述べている部分がある。武藤鉄城は高橋文太郎が『秋田マタギ資料』をまとめるために、高橋の仕事を手助けすることに徹し、「この聞き書きを自分の調査として発表すべきではないと、そのけじめだけは守っていた」という（冨木　1989　507頁）。武藤は昭和３年（1928）から22年までの調査記録を日本常民文化研究所に送っており、『秋田マタギ聞書』は、その遺稿をまとめて作られたものであることが、『秋田マタギ聞書』の特徴であろう。その中には聞き書きだけでなく、巻物などの文書類なども豊富に収録されている。

少し年代を前後するが、昭和44年（1969）には、千葉徳爾『狩猟伝承研究』が出版された。千葉は冒頭「日本における狩猟民俗研究の歩みは、一般的な民俗資料ないし伝承文化への関心の高まりが、その一部分としての狩猟民俗をも調査せしめるようになったに過ぎ」ないと従来の狩猟伝承研究を批判した上で（千葉　1969　15頁）、各地の狩猟伝承を総括し、日本文化の中での狩猟伝承を明らかにしようと試みている。今までの報告や自身の調査報告から、狩猟伝承に一つの方向性を示した大著である。

こうした学術的にも狩猟研究の大きな転機となる著作が出版されると同時に、昭和53年（1978）には岩手県碧祥寺「マタギの狩猟道具」486点が国指定重要有形民俗文化財に指定される。

この頃には太田雄治『消えゆく山人の記録　マタギ』などが出版される。太田は30年以上にもわたって武藤鉄城のもとでマタギ集落の調査を行っており、その記録を一冊にまとめたものである。巻頭言で、「マタギに関する体系づけや学問的考証をするつもりはなく、採集や現地取材を土台とする“現場主義の事典作り”に中心をおいた」（太田　1974　50～51頁）と述べるとおり、特にマタギ言葉においては詳細な記述がある。そして昭和50年代から秋田、新潟を中心としたマタギ習俗の調査を行った田口洋美の著作が相次いで出される。田口は阿仁マタギと新潟県三面マタギとの関連を中心に、聞き取りを行った。人々の言葉を忠実に記述することによって、マタギとして生活してきた人々やマタギをとりまいた人々の息吹を感じることのできる大作である。

戦後、特に昭和40年代頃からの報告書にはマタギの習俗について、数多くの写真も記録されるようになった。今まで公表することのなかった熊狩り、ケボカイなどの儀式が映像として数多く残されるようになったことも特徴であろう。

また、こうした学問的な流れとは別に、昭和57年（1982）、昭和62年（1987）には阿仁マタギを題材とした「マタギ」「イタズ」という映画が相次いで公開された。幅広い年齢層を対象としたものでは、既に大正時代頃から、宮沢賢治などの童話にマタギは登場しているが、昭和40年代、秋田県出身の漫画家、矢口高雄が『マタギ』という漫画を出し、新たな分野からマタギを紹介することを試みている。脚色されている部分は否めないが、映像や絵画によって、生きて動いているマタギが身近に見られるということは人々の興味をひく上では大きなことであっただろう。

こうした時代の流れを受けてなのか、阿仁町では、積極的にマタギをアピールすることにつとめるようになる。

「マタギの里」としての観光事業がさかんになったのは、昭和50年代から平成にかけてであると思われる。観光に先立ち、まず交通面から、平成元年（1989）に秋田内陸縦貫鉄道が全線開通した。鉄道自体は阿仁合線が昭和11年（1936）に鷹巣・阿仁合間が開通しており、昭和38年（1963）には比立内の駅も誕生している。阿仁合線は、昭和60年（1985）に廃止される話も出たが、阿仁合線、角館線をひきついで、昭和61年（1986）には秋田内陸縦貫鉄道が開業され、鷹巣、角館間を結ぶ鉄道となった。（阿仁町　1992　389～395頁）。

昭和57年（1982）には打当にふるさとセンターが開設され、その中にマタギ資料を展示した資料館も作られた。平成４年（1992）に熊牧場もでき、打当を中心に観光施設が多く建てられるようになった。打当地区では平成17年（2005）から「どぶろく特区」も申請し、そのことも観光客をひきつける要因ともなっている。そうした観光面とは別に平成16年（2004）には根子番楽が国指定無形民俗文化財に指定され、芸能面からも阿仁マタギの集落は注目されることになる。

昭和10年代頃から、近日マタギの習俗は消滅してしまうと危惧する声は聞かれていた。現在、生業としてのマタギは衰退しつつあるが、観光という面から、新たなマタギ、またマタギ集落が見直されてきている。このことは、過去多くの人たちが取り組んできたマタギについての調査研究の成果の一端であろう。この反面、マタギ集落には他の市町村と同様、過疎化の問題も抱えつつある。従来から連綿と続いてきたマタギについての習俗の他にも、マタギ集落が現在抱える問題や観光との関係など、今までとは違った視点からマタギを取り上げる必要もあるだろう。従来の研究を見直しつつ、新たなマタギ研究を模索していくことが今後の課題であると思われる。

3　阿仁マタギの生活について

ここでは、マタギの生活を、主にマタギが活動していた昭和30年頃根子集落での生活暦を中心に、述べていきたい。

根子集落の概要

根子集落については、享保15年（1730）岡見知愛が記した『六郡郡邑記』には、30戸と記録されている（岡見　1972　124頁）。現在根子の集落は約80戸であるが、昔は60戸以上になると自給自足が出来ないと言われていた。そのため、何度か他地域を開墾し、分村している（写真１　八木沢集落にある開墾碑）。開墾の歴史は古く、文化10年（1813）から根子の村田松五郎が上小阿仁村を開墾、移住し、後に八木沢村が誕生している（上小阿仁村　1994　287頁）。その他、上小阿仁村萩形の開墾にも根子の人々が協力したらしい。昭和にはいってからも、米内沢の県営の開墾地や旧森吉村惣瀬沢などの開拓作業にも加わったという。また戦後は、八木沢周辺の赤沢なども開墾し、これらの地域では小豆などを栽培するため焼畑を行っていた。

写真１

根子では、マタギや売薬業などが主な生業であったが、昭和の初めには缶詰工場、移動製材工場などが作られたという。昭和16年（1941）には大阿仁炭鉱によって根子から阿仁合まで索道が作られた。大阿仁炭鉱は昭和36年（1961）頃に閉山したが、（阿仁町　1992　776頁）この炭鉱会社のおかげで、他地域へ開拓に行くことはなくなり、新たに根子に居住する人もいたという。

交通

昭和の初め頃までは、集落内に流れる阿仁川沿いに道路があり、山越えをして五城目の市まで行ったという。日用品から婚礼衣装などの大きな買い物まで、ほとんど五城目の市で購入したらしい。しかし根子から五城目までは１日で通えないため、途中の八木沢、萩形に１泊して五城目へ行ったという話も聞いた。現在その道は誰も通らなくなってしまったため、集落内でも知らない人が増えている。昭和６年頃には、根子と地蔵岱を結ぶ線ができ、現在の国道105号線へ出ることが容易になった（阿仁町　1992　407頁）。

昭和38年（1963）には阿仁合線が延び、笑内の駅が誕生する。それまで大きな買い物は五城目で行っていたが、買い物の範囲が鷹巣、能代まで広がるようになった。

ただ笑内へ出るには、集落から山のヘソを歩いて（山に沿って歩いて）、駅に出かなければならなかった。昭和50年（1975）には現在の根子トンネルが完成し、笑内へ抜けるのが容易になった。根子トンネルは国道105号線につながっており、現在は鉄道を利用するより、自家用車で仙北、鷹巣、秋田市内など

へ行くことが多くなっている。また、買い物の範囲も鷹巣や大館、秋田市などへ拡大している。

集落内の気質

根子は、源氏の末裔が開いたものと、平家の落人が開いたものとの２つの伝説が残されている。どちらが正しいかは論議の分かれるところであり、はっきりとはしない。根子では佐藤姓が一番多い。源氏の末裔としては、佐藤維信の子孫という家があり、現在オヤカタの家と呼ばれている。この他、山田、渡部、上杉、田口、村田姓などが集落には多い。また、昭和に入って炭鉱会社が来てから根子に住み着いた家も数軒ある。

昭和45年（1970）に出された『阿仁マタギの習俗』の巻頭言に、マタギ集落について「明治の年代に至って熊の胆や猿の産子焼等の製法を知り全国に行商するようになったようであるが、売薬による収益の多かったことと、全国各地の生活様式を広く見聞した経験によってマタギ部落は他の部落よりも生活は裕福で文化的であったようである」と書かれている（1970　巻頭言）。

また、高橋文太郎『秋田マタギ資料』の中に、佐藤正夫「根子部落之概要」という資料が付されている。これは昭和７年（1932）に書かれたものであるが、現在でも佐藤正俊氏宅に原資料が残されている。佐藤は根子集落についての規則や当時の集落の状況などについて記しているが、その中に生活改善運動について触れられている部分がある。この生活改善実行案として、大正15年に設定されたとあるから、全国でも早い時期に行われたと思われる。内容は冠婚葬祭を簡素化するものであり、婚礼の祝いごとは１日で行い、翌日の披露会（アトフキ）を禁止すること、出産祝い（孫祝い）などは廃止、葬儀の際にも各家が料理を持参することをやめ、料理の材料となるもののみ贈ることなどが書かれているが、今回結婚式の様子などの聞き取りを行った際には、昭和40年代でも婚礼は３日間ほど行われていたというから、それほど厳密に伝えられたものではなかったと思われる。

また集落内でも、昔から旅マタギや行商でさまざまな地域に行ったため、子どもには教育を身につけさせることが大切だといわれてきた。そのため、根子では教員や薬剤師が昔から多いという。ただ、現在ではせっかく教育をつけても近隣では働き場所がないので、集落を出、県外で活躍している人が多く、集落内に残る人が少なくなっているのが悩みであると聞いた。

集落内の組織

集落内のマタギ組織は、ゼンベエ（善兵衛）組、シチノジョウ（七之丞）組、イノスケ（伊之助）組があったと伝えられている。ただしイノスケ組の家は転出し、根子にはない。シチノジョウ組は秋田藩へ熊の上納を行い、鉄砲も下賜されていた。文書類は現在もシチノジョウの家（佐藤正俊氏宅）に残されている。

マタギに出る時には親戚同士や、気の合った人が集まり、シカリも実力のある者がなるという。たとえばシチノジョウ組は、ギンゾウ、サスケ、マンベエなどの家の者が組になっていた。

父親がシカリであった場合、息子に実力があれば次のシカリとなるが、必ずしも世襲という訳ではない。

佐藤正夫「根子部落之概要」によると、根子集落の組織は以下のようなものであったという。

①肝入・・現在の村長。旧荒瀬村の本村に一軒のみ

②オヤカタ（地主）・・根子集落に一軒のみ。現在根子ではオヤカタと呼ばれる屋号の家がある。

③組頭（伍長）・・組頭の下に小前という家があり、組頭は本家、小前は分家であることが多い。組頭一軒と小前四軒で五人組を作る。
組頭の家は、善兵衛、忠太、文左衛門、平兵衛、宗兵衛、半四郎、伊之助、七之丞、三右衛門、弥吉、四郎兵衛、七郎兵衛、六之丞で、さきほど上げたマタギの三組はこの組頭の中に含まれる。

④小人頭（小前頭）・・組頭とは別に小前の意志を尊重し、組頭との交渉を行う。集落に二軒あった。

このように、マタギの組は組頭と何らかの関係があったと思われ、五人組などの組織ともかかわりがあったと思われるが、詳細については今後の課題にしたい。

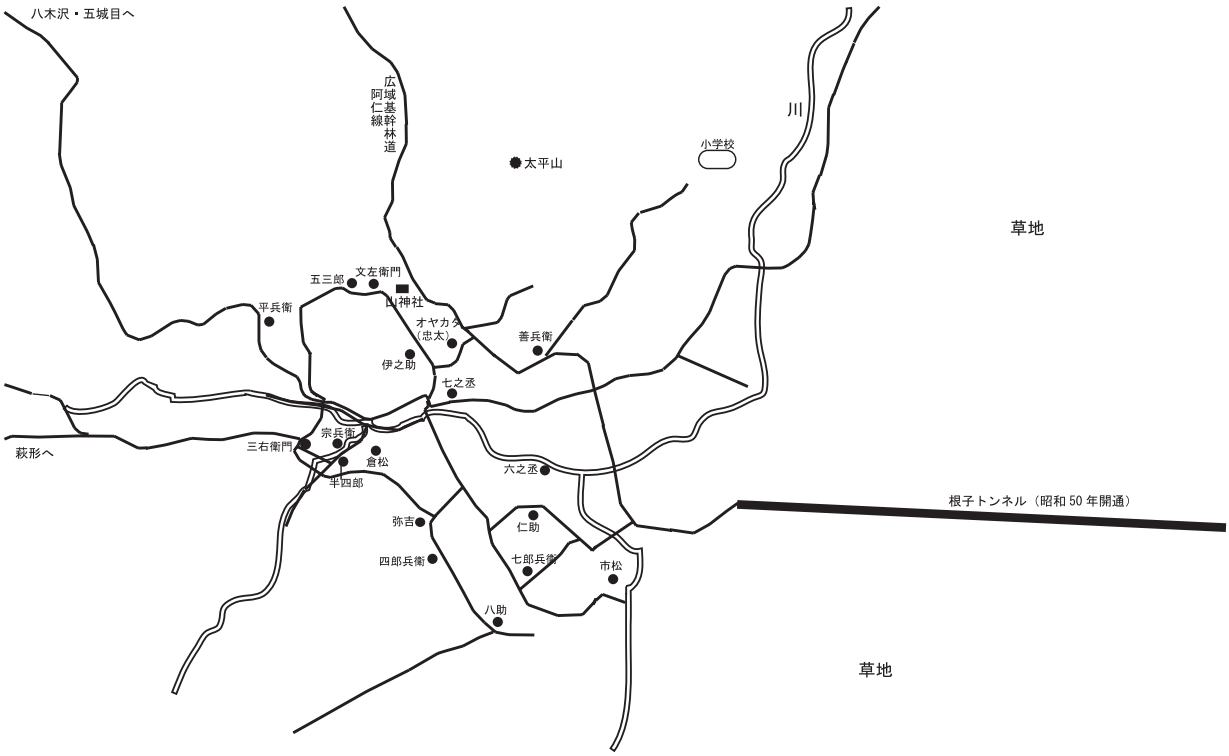
なお、根子集落には以下のような数え歌が残されているという。

一に市松　二に仁助　三に沢口　四に四郎兵衛　五に五三郎

六に六之丞　七に七之丞　八に八助　九に倉松　十に重兵衛

この歌がいつから歌われはじめたのかは定かではないとのことであったが、今から２～３代前には歌われていたらしい。この歌のなかにはまだ２～３代目の分家もあるとのことであったが、ほとんどが10代以上続いた家を歌っている。

上記の組頭の家と、数え歌に歌われていた家を示したものが図１である。現在では根子にはない家や、場所を移した家もあるが、昭和20年頃にはだいたい図のような場所に家が建てられていたという。



※家の場所は昭和20年代のもの。佐藤正夫「根子部落之概要」にあった組頭の家と数え歌にうたわれた家のみプロットした。

図１　組頭の家と数え歌に歌われていた家

４　集落の一年（昭和 30 年頃を中心に）

ここではマタギが行われていた昭和 30 年頃の集落の一年について述べていきたい。
一年間の主な生業や行事についてまとめたものが表２である。

集落全体で行う仕事

根子マタギは旧暦で行動したため、昭和 30 年頃までは旧暦で行事を行う意識が強かったという。

薪運搬

秋までに集落の青年が山で薪を切ってある場所にまとめておく。その薪を各家に運ぶ作業である。１月７日～16日の小正月までをモチアイの期間と言ったが、このモチアイの期間のうち１日、集落全部の家が集まって山から各家に薪を運んだ。

道路掃除

チョウバソウジと呼んでいた。これは集落全体で行うのではなく、各集落に組が分かれており、その区長が参集した日に行った。春と秋、大体４月と８月頃に行った。

魚捕り（アミウチ）

田植えが終わった頃、集落全員で川魚を捕りに行った。このことをアミウチと言った。山のトコロの根をつぶしたものを袋の中に入れて川に入れる。トコロの根は苦いので、苦しがって浮いてくる。それを獲るのだが、アミウチを行うのは１年に１度だけだった。カジカやイワナ、ヤマベなどが獲れたという。マスなどもヤスで獲ったりした。マスは昭和 35 年頃までは獲れた。

生業暦

１～３月

マタギは一年中出るが、正月の期間はマタギに出ず、小正月が過ぎたらマタギに出る。マタギに出る前の１週間は山神様に夜通しお参りをして身を清める。その後田んぼに的を立ててためし撃ちをしてから出た。

正月すぎから春にかけてはバンドリ（ムササビ）を取った。バンドリは皮を取って首巻にすると満州あたりでは良く売れた。また、ウサギなどもとった。ウサギやバンドリなどの肉は６月頃まで食べられるように干して保存しておくという。バンドリは１人もしくは２人くらいで猟に行き、月夜の晩に電灯を灯しながら撃った。また、熊も春先にかけて捕りに行った。

小正月が過ぎると、田んぼの堆肥運びを行い、あとは雪が溶けるまで、田んぼの作業は特にない。

４月～６月

５月頃になると田おこしが始まる。チョウバソウジ（道路掃除）なども行い、田植え前には田の水路を確保するためのドブ上げを行う。これは集落全員でなく、地権者で行った。

田植えは現在は５月頃に行うが、手で植えていた頃は６月頃に行った。ユイがあり、分家になった家や親戚などが５～６軒のグループで行う。１軒で持つ田んぼはそれほど大きくはなかったので、大体１日で１軒終わった。ユイ全部の家の田植えが終わると、田植えじまいと言い、田植えに関わった人たちが集まって皆でごちそうを食べたという。

田植えが終わると、先ほども述べたようにアミウチを行い、薬の行商に出る人もいた。

薬の行商は大体２か月ぐらいで、お盆までには帰ってきたという。

７～９月

夏から秋にかけてはマタギに出ることは少ないという。食物を取っている間の熊には胆汁がたまらないため、取ったとしても二束三文でしか売れないからだという。

８月頃、またチョウバソウジなどを行う。薬の行商から帰ってきて盆を迎え、畑作物などを栽培す

る。

10～12月

稲刈りは10月頃に行う。稲刈りが終わり、米を乾燥させ終わると、ニワじまいと言い、稲刈りに携わった人々が集まってごちそうを食べる。稲刈りが過ぎるとまた薬の行商へ行く人が出る。10月末頃から熊撃ちが始まる。また、10月末から11月頃は山鳥を撃ちに行った。11月は山鳥も脂ののっている時期という。

この頃から熊撃ちが始まり、マタギに出る人もいる。行商に出た人は、12月31日までに帰ってくるという。また、稲刈りが終わると嫁入りの季節だと言われた。

年中行事など

年中行事についてはさまざまなものがあるが、ここではマタギに関する行事を中心に述べていきたい。

根子集落では昭和50年代まで、長く旧暦が使われていた。マタギに出る時には正確に天候をよむ必要があり、季節を反映した旧暦でなければ分からなかったからであるという。

正月

12月28日頃から正月準備をはじめる。28日にススハライを行い、餅をつく。クニチモチと言って、29日には餅をつかない。歳神棚などは特には作らない。

31日には年越しをする。年越しには一人一人１匹魚（キンキン）やでんぶ、なます、煮しめなどを食べる。煮しめには、正月前に集落に売りに来る八郎潟のフナを事前に購入しておき、干し魚にしておいたものを使用する。夕方に食べた後、夜寝る前くらいにそばを食べたという。

正月のごちそうなどは特に決まっていないが、元日にはハタハタの一匹魚を焼いて食べたという。雑煮は煮しめに餅を入れて食べる。

年越しのそばなどはウサギの出汁で食べるのが良いと言われた。ウサギを食べることによって「ウ（ン）サキ」と縁起をかついだのだという。

七草は山菜を塩漬けにしたものを粥に入れて食べた。正月７日までは仕事を休み、正月８日から15日はモチアイの期間と言われる。

正月15日の朝には、鳥追いが行われる。以前は子どもが中心ではあったが、男性達も「ホーイホイ」と歌いながら山神さまの神社から田んぼを広く回っていた。現在、鳥追いは正月三日に行われている。まず子どもたちが太平山にお参りしたあと、集落中をまわるが、以前よりは祭りの規模が縮小されている。

また正月17日には集落を雄獅子と雌獅子の獅子舞が回る。家々の座敷では、ミズキに紅白の小さな餅をつけたマユダマを飾っているが、獅子がマユダマを取っていく。マユダマを取ることによって厄払いになるという。

また、年によって時期が異なるが節分の豆まきがある。節分の豆とマユダマの餅とを持って山に入ると事故にあわないと言われる。マタギに限らず山仕事をする人は必ず豆とマユダマの餅を数個ずつ携帯したという。

３月彼岸にはマトビを行う。墓地に木を立てて火をつける行事で、先祖を呼ぶものらしい。現在は若妻会が行っている。

山の神関連の行事

現在は９月第２日曜が集落の山神社の祭りで、この日に番楽が奉納されているが、昭和30年頃は山神社の祭りは４月８日に行われていた。この日は八木沢や萩形の人達も根子に来、皆で祭りを楽しんだという。番楽だけでなく、相撲なども余興で行われ、土産などもふるまわれたという。

その後、人々の仕事などの都合で山神社の祭りは10月になり、現在は９月に日にちがかわっている。

６月15日には、山仕事をしている人々はみな森吉山に登り、モロビ（アオモリトドマツ）を持って帰るという。根子だけでなく、打当、比立内などでも森吉山登山は行われていた。また、根子の分村である八木沢、萩形の人々もマタギを行っているため、この日は森吉山に登ったという。

このモロビはマタギにとって身を清めるのに大事なものである。マタギは死火を嫌わず、旅に出る前に霊柩車を見ることは縁起が良いとされるが、産火は嫌う。家に子どもが産まれたらしばらくは山に入ることを忌むが、どうしても山へいかなければならない時は、このモロビをいぶして煙で身をはらわなければいけないと言われた。ただし、佐藤富久栄氏から聞いた話によると、佐藤氏のマゴじいさん（祖父）がモロビで身を清めて猟に出たが、ケガをしてしまったということで、やはり産後しばらくはマタギに出てはいけないという教訓であった。

マタギだけでなく、山に入る人たちにとって大切な日は12月12日の山の神様の日である。この日は山の神様の山調べの日と言われ、山をどの位荒らしているか、山の神様が調べにくる日であるという。山仕事をする人はこの日は山に入ってはいけないが、どうしても山へいかなくてはならない時は、午後から山に入ればよいと言われている。

12月12日はマタギの人達は山神様にこもる。その後、田んぼに的を立てて、鉄砲の試し撃ちを行う。的で腕だめしをして、猟に出る。この日はシトギ餅といって、米をうるかして（ふやかして）粉にしたもので二重ねの餅を作り、みんなで焼いて食べる。しかし、子どもを産む年齢の女性のみ、この餅を食べてはいけないという。

子どもを産む年齢の女性は、他にも十五夜の時の供え物も食べてはいけないといわれている。

番楽

根子番楽がいつから始められたかは定かではないが、番楽は代々、佐藤二朗氏の一族で行われていたという。佐藤家だけでなく、佐藤家の親戚にも番楽は伝えられたが、大正時代頃までは血縁関係がなければ番楽は伝えられないことになっていた。一時期は株式組織のような形を作り、皆で資金を出し合い、道具などを購入したり、公演で得たお金などを分配していたという。

その後、根子の家の長男に伝えられていったが、昭和の初めには二男以下にも番楽が伝えられるようになった。ただ、年々子どもの数が減り、番楽の継承が危ぶまれるようになっていく。

現在番楽保存会の会長である佐藤二朗氏は長年根子小学校で教員をしていたが、昭和39年（1964）に番楽子ども会を作り、ふるさと教育の一環として全校生徒に番楽を教えた。その流れが現在まで続いており、根子番楽は平成16年（2004）に無形民俗文化財に指定されている。

公開時期

昭和50年頃から、毎週水曜に番楽の練習を行うようになった。番楽は大体小学校１年生ぐらいから始めるが、舞台に立つまでは３～４年かかると言われている。

番楽は毎年４月から12月（行商が行われていた頃は11月）まで行われる。ただ冬の間も練習は欠かさずに行われ、道具の手入れもする。

現在は依頼があれば国内外を問わずに公演に出かけるが、演じる人の都合などもあり、県外では東北地方を中心に公演にまわる。

集落内では年に三回公演を行っている。

８月14日　番楽公開日

９月第２日曜　神社奉納

12月第１日曜　幕おさめ

このうち、一般に公開しているのは８月14日で、後は集落内の人へ番楽を演じるという。

講集団など

根子集落には庚申、念仏、観音講の三つの信仰的講が現在でも行われている。

庚申講

集落内には３つの庚申講があり、本家で行われている庚申講を大きい庚申、分家で行われている庚申を小さい庚申といっている。以前は庚申の日に各家がまわり番になって行われていた。当番になった家は精進料理を作ってもてなさなければならなかったので、だんだんと負担が大きくなり、現在では各家々で２千円ぐらいお金を出し合って仕出しなどをとって公民館で行っているということであった。

念仏講

女性が中心になって行われている。１年に１度、春彼岸の時に児童館に集まり、百万遍の数珠まわしを行っている。この念仏講は現在も彼岸に行われている。

観音講

正月17日と、５月17日、９月17日の３回行っていたが、現在は正月17日の１日のみになっている。観音講もまわり番で行われ、当番になると一年間行わなければならなかった。特に正月17日には厄ばらいをするといって、厄年の人（男女とも25、42、62、88歳）の人を祝う。山神様の向かいあたりに観音堂があり、そこに当番の人が代表してお参りにいく。厄年の人々は当番の家におまいりに行った。厄年の人々は上座に座らされ、接待を受けたという。現在も厄年の人のお祝いとして、正月17日に児童館で行われている。

売薬業について

根子集落ではマタギと同時に売薬業も行われていた。阿仁マタギのうち、売薬が行われていたのは根子、打当中村の集落であったが、薬を製造していたのは根子だけであるという。

根子集落は古くから、熊の胆を佐竹藩主に上納していた。熊の胆を上納することによって、鉄砲を下賜されたこと、鉄砲は、10月から４月までに限って預けられていたことなどの文書が佐藤正俊氏宅に残されている。

マタギの売薬業についてはさまざまな記述があるが、『狩猟習俗調査報告書』にその概要が次のように記されている。

「藩政時代は熊の胆と皮に限って上納した。佐竹藩の御殿製薬所が毎年一定量を買い上げた。しかし買い上げ価格は一定していなかったという。外に地元のお山守（山林支配人）にも買い上げてもらったという。残ったものは各自分配して使用したり、売薬として換金したといわれる。売さばきについては熊の胆を中心とした売薬で、特に根子マタギは売薬についても古くから活動し、肝入りから許可証をもらって、マタギとは別に販路をもっていたといわれる。明治以後も行商許可証を役場からもらって、全国的に売薬活動をしたといわれるが、旅マタギの範囲がまた主たる販路となったようである」（秋田県教育委員会　1964　33～34頁）

このように、売薬活動が始まったのは明治時代以降と考えられている。薬を製造しなくても、動物の部位は病気や怪我に効くと言い伝えられてきた。

表３は文献の中から薬と考えられていた動物の部位をまとめたものである。この表を見ると、熊のさまざまな部分が病気や怪我に効くと考えられていたことが分かる。また、熊の胆は万病の薬と言われており、非常に高価な薬とされていた。

熊の胆については、寛政10年（1798）に出された『日本山海名産図絵』の中に、「熊胆は加賀を上品とす、越後、越中、出羽に出る物これに亞ぐ」とあり、夏胆、冬胆があり、夏のものは皮が厚く胆汁が少ないので下品、冬の胆は皮が薄く胆汁が多いので上品、８月以降の胆を冬の胆とすると書かれている。また、古くから偽物の胆が売られていたらしく、偽物を見分ける方法として、胆を米粒ほど取って水に沈

め、真っ直ぐに落ちれば本物であるとしている。その他偽(にせ)の熊の胆を作る方法についても記されているので、当時は相当偽の熊の胆が出回っていたと思われる（平瀬　1970　22～23頁）。佐藤正俊氏宅に、熊の胆を佐竹藩の製薬所に納めた書付が残されており、その文書を見ると熊の胆は上、中、並と分かれており、値段も年代によって異なっている。

「マタギ勘定」という言葉が残されているように、猟の獲物は参加した人全員に平等に分けることが決まりになっている。たとえば熊を捕った時には、熊の胆、皮、血、性器などは仲間同士でセリで分ける。セリで得たお金や熊の肉は、参加者に平等に分配するという。それを各地に売りに歩いたというが、明治時代以降、その獲物の部位を利用して薬を製造販売していた。

「根子部落之概要」では、昭和７年当時、根子集落内に76名の行商人がおり、免許のある売薬方数は五五方とされている。当時の行商先と売薬販売数については表４、５のとおりである。宮城県が圧倒的に多く、東北地方や北海道の周辺地域に販売されていることが分かるが、青森県への行商が大変少ないことが注目される。佐藤は出稼者についても記しているが、主に杣夫として出稼ぎに行く先は、樺太が15名、青森10名、福島５名となっており、出稼ぎでは青森に多く行っているようである。また、早川孝太郎「阿仁またぎの山詞その他－秋田県北秋田郡阿仁合谷」では、「根子は戸数80余戸、その中の大部分が売薬を副業として、年額８千円乃至１万円位の収入があるといふ」とあり、昭和初期に売薬業が集落内の収入源であったことが分かる（早川　1937　５頁）。なお、平成２年の売薬行商先一覧は表６に示した。

佐藤正夫の記した売薬業に携わる者76名のうち、全員が薬を製造していたわけではなく、根子には昭和初期、４～５軒の薬問屋があったと言われている。その後薬問屋は増え、７軒ほどになった。

薬問屋を行っていた家は、

渡部武治郎　（フタマタ）
山田留三　　（シタンカラ）
佐藤富久栄　（ハチスケ）
山田勝　　（シロベエ）
佐藤二朗
山田畝松
佐藤三明　の７軒である。

それぞれの家で家伝薬を作っており、人を雇って売薬を行っていたという。売薬の方法は、得意先に置き薬として薬を置いておき、年に数度薬を補充しつつ使用した分の金額を請求する配置売薬業と、そのつど現金で売買する売薬業とがあった

上記７軒のうち、現在は転居している家もあるが、このうち３軒での家伝薬は以下のとおりである。

佐藤二朗氏宅

佐藤二朗氏の家よりも、佐藤氏の叔父さんが積極的に行っていたといわれている。昭和初期まで「さくら至誠堂」という薬局を経営していた。家伝薬は気つけ薬で回(かい)生散というものを製造していた。宮城が一番売れるため、仙台に支店を出していたという。

佐藤富久栄氏宅

家伝薬は、

大正散（胃腸薬　熊の胆にニュウトウ（牛の乳からとったもの）、ブケイヤクなどを混ぜる）
霊将湯（婦人薬　熊の子宮とトウキなどを混ぜる　振り出しの薬）
牛馬薬（ナイラという骨が弱ってくる病気によい。熊のハチネンブクロ（腸）で作る）

などがあった。特に店は持っておらず、問屋として、これらの薬を分家などにも配り、それぞれが売薬に歩いた。

渡部武治郎氏宅

渡部氏宅では現金で薬の売買を行っていた。売薬で全国を回っていたのは、父親の時代である。武治

郎氏は大正11年（1912）の生まれで、根子で最初に薬剤師の資格を取った。父親は約20種類くらいの薬を作って販売していた。薬の名前は覚えていないが、利尿散、神経痛、リューマチの薬や結核の薬などを販売していた。このうち利尿薬は良く売れた。また中将湯という婦人薬を真似て「ゼンショウトウ」という薬などを販売していた。武治郎氏は太平洋戦争中ハルピンの部隊におり、戦争から帰ってすぐ阿仁合に薬局を開いたため、売薬に歩いたことはないという。

このようにそれぞれの家伝薬を製造していたが、昭和18年、秋田県製薬株式会社が秋田市内に設立する。昭和18年は臨戦薬事法制定が公布され、全国の薬剤師を統一する目的で新薬剤師会が設立されている。各都道府県に会長がおり、秋田県は山田儀助という人物であった。秋田県製薬は山田儀助が初代社長として設立した。なお、この会社の設立には佐藤富久栄氏の父親や山田富治氏の家などが尽力した。

現在の秋田県製薬では、佐藤国男氏が監査役となっている。佐藤国男氏は根子で配置売薬の元締めをしていた人であるという。売薬に関しては、終戦後には４～５軒で根子行商組合を作り、販売許可、営業許可などが取られていた。

女性の仕事

マタギ資料についての記述は膨大にあるが、女性の仕事について書かれているものは少ない。しかし、高橋文太郎『秋田マタギ資料』の中に、佐藤正夫「根子部落之概要」という資料がある。これは昭和７年（1932）に書かれたものであるが、現在でも佐藤正俊氏宅に原資料が残されている。

佐藤は「産業状況」の中で、あくまでも主業は農業であり、副業として猟人（又鬼）や売薬を行っていると述べている。そして、女子の生業についても触れ、

「女子ノ副業ハ夏季ハ青物（野生物）ヲ採取シ市場ニ販売シ秋季ハ栗茸果物ノ販売ニ努メ冬季ハ節合草履ノ製作或ハ木材薪炭等ノ運搬ノ労役ヲナス」

と述べている。佐藤富久栄氏の母親やマゴバアサン（祖母）も行商に行き、山菜などを売ったというが、行商先は阿仁合が中心で、比立内の市場などには行かなかったということであった。また、さきほども述べたが、高橋文太郎も女性が薪採り、山のワラビ、ゼンマイ採取、堆肥運びなどに従事していることを指摘しており、稲の生育中は男女とも農作業を営んでいるが、農閑期、男性がマタギや売薬に出る間の女性にはかなり多くの仕事があったことが分かる。

比立内の松橋ユリ子氏に、昭和30年代の話を聞くことができた。ユリ子氏は昭和35年に能代から比立内に嫁入りしたが、当時はまだ他集落から比立内へ嫁いできた人はほとんどなく、結婚してからは集落の女の人たちが「都会から来た嫁だし、稼げるべか」と見にきたという。集落の女性たちは皆腰にナタを下げて歩き、男なみに農作業などを行ったという。ユリ子氏は結婚前までは農作業など行ったことがなく、他の人と同じように仕事をこなすのは並大抵のことではなかった。また、本家に嫁いだため、何かあれば本家が采配しなければならなかった。ユリ子氏の姑が行っていたが、姑と会話はなく、料理などは盗み見て覚えたという。姑にはきびしくしこまれたが、その当時は何とも思わなかった。ただとにかく色々と覚えなければいけないと必死だった。そのおかげで、今は本家の嫁として、何かあればいろいろと指図が出来るようになったという。

夫の時幸氏が猟に出る時は少しでも高声を出してはいけないといわれ、猟に出れば何があるか分からないので、とにかく笑顔で送れということはいわれたという。マタギ集落では男性に注目されることが多いが、このような女性の支えがマタギの人たちを支える力であることが分かる。

５　まとめ

阿仁マタギについての文献等の整理と、マタギを行っていた頃の生活暦について述べてきた。柳田國男が「マタギという部落」の中で、夏は農作業に従事し、冬のみマタギに出るだけで、他の集落と何ら

変わりがないと述べているが、事実、１年間の暮らしぶりは、山間の農村と同じであることが分かる。
　けれどマタギについて、今までさまざまな人が記録を残そうと懸命になったのは、狩猟文化を知りたいと思うことのほかにも、マタギや行商先で知った外の世界を柔軟に吸収し、かつその文化を受け容れていったという集落独自の気質にもあるのだと思う。山間の小さな集落にとどまらず、外の文化を積極的に取り入れてきたその原動力こそが、人々を魅きつけてやまないのではないだろうか。

表２　マタギ集落の一年

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
共同作業	8日～15日（一日のみ）　薪運搬			チョウバソウジ		アミウチ（田植え後一日のみ）	草刈り（堆肥用） 道刈り	チョウバソウジ				
農作業	堆肥運び				田おこし	田植え				稲刈り		
行商						薬の行商（お盆まで）→	→	→		薬の行商（正月まで）→		→
マタギ	バンドリ 小正月後初マタギ →	クマ →	→								クマ → バンドリ → 山鳥 →	→
芸能・行事など	7 七草 15 鳥追 17 獅子舞・観音講	節分	念仏講 彼岸　マトビ	8 山神社の祭 番楽奉納舞 番楽開始	17 観音講	15 森吉山登山 サナブリ運動会	お盆	十五夜 14 番楽公開	17 観音講		番楽幕おさめ	12 山の神の祭り 28 正月準備

※日にちはすべて旧暦

昭和30～37年までの狩猟期間
北海道以外11月１日～３月15日　毛皮獣12月15日～２月末日
北海道10月１日～２月15日　毛皮獣北海道11月15日～１月31日
※その他に有害駆除期間あり

表３　文献にみる薬用とされた動物の部位

	効用	服用の仕方	地域名	出典
熊				
熊の胆	胃腸薬、毒消しの妙薬	胆のうを乾燥したもの。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
熊の胆	血圧の高い人、肋膜、肺炎		上桧木内村戸沢	秋田マタギ聞書き
クマノイ（熊の胆）	胃腸薬		阿仁、仙北、鳥海、岩手	消えゆく山人の記録　マタギ
クマノキモ（熊の肝臓）	腹痛または万病の薬。	熊の肝臓。干して焼いたり煮たりして食べる。	岩手・上桧内	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の肝臓	心臓、肝臓、結核の薬	乾燥して粉末にして飲む。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
熊の肝臓	心臓、結核の薬	乾燥して粉末にして飲む。		消えゆく山人の記録　マタギ
熊の頭蓋骨や脳髄	脳病			マタギ−日本の伝統狩人探訪記−
熊のシャレコウベ		薬売りが宣伝に使う	直根村百宅	秋田マタギ聞書き
クマノシャレコウベ（熊の頭蓋骨）	頭痛の薬	乾燥して黒焼きにして飲む。	上桧木内	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の頭（ハッケ）	脳病の特効薬	皮をはいだ生のものを粘土で包み、米ヌカの中で蒸し焼きにして薬とする。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
熊の脳みそ	脳病の薬	陰干し	直根村百宅	秋田マタギ聞書き
熊の脳みそ	頭痛の薬	煮て食べる。	上桧木内、鳥海	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の舌（サヨ）	熱さましや傷薬	乾燥して粉末にして飲む。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
熊の舌	傷薬	干して鮫皮で下ろし、傷が少し治ってからつける。	大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き
クマノシタ（熊の舌）	傷薬	干して擦って傷口にぬる。	阿仁	消えゆく山人の記録　マタギ
熊のあばらの肉	打ち身	鮫皮でおろして粉にしたものを塗る。	上桧木内	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の脛や手の骨	傷薬	鮫皮でおろしてつける。	玉川	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の骨	打ち身の薬 血圧・頭痛・虚弱児の薬	すりつぶして粉末にし酢または酒でねり合わせてにする。また焼いて粉末にして飲む。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
熊の足の骨	神経痛や赤痢			マタギ−日本の伝統狩人探訪記−
熊の脛骨、手の骨	傷薬	干して鮫皮で下ろす	田沢村玉川	秋田マタギ聞書き
クマノホネ（熊の骨）	打撲、血圧頭痛	すりつぶして粉にし、酢または酒で練り合わせ、傷口に塗ると打撲の薬。焼いて飲むと血圧頭痛の薬	阿仁	消えゆく山人の記録　マタギ
クマノアシノベラ（熊の足の甲）	ホルモン剤	乾燥したものを削って飲む。	上桧木内	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の血（ヒダリ）	頭痛・疲労回復・強壮剤	にぎりめしにしみこませたり、腸詰めにしたりして持ち帰り、乾燥して粉末にして飲む。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
クマノチ（熊の血）	疲労回復	熊の血。煮て陰干しして保存。	雲沢、西木村、上桧木内、阿仁	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の脂	ヤケド、擦り傷、切り傷、擦り傷、ヒビ		上桧木内村戸沢	秋田マタギ聞書き
熊の脂	ヒビやヤケド	アザミを煮る時に入れると旨い	大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き
熊の脂	水あたり、傷薬	薄く切って傷の上につけておくと治る	大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き
熊の脂	水あたり		阿仁	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の腸		いったんゆでた後、貝焼にして味噌煮にする。胃腸に良く効く	田沢村玉川	秋田マタギ聞書き
熊の子宮袋と付随する小腸（熊の帯−ケマシ−と呼ぶ）	お産の薬	乾燥して帯にまきつけ安産のしるしに。難産の時はせんじて飲む	阿仁	狩猟習俗調査報告書
オス熊の性器（サタテ）	性病の薬	乾燥して煎じて飲む。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
熊の陰茎	シモの病			マタギ−日本の伝統狩人探訪記−
クマノタキリ（熊の男根）	性病、ホルモン剤。	粉にして飲む。	上桧木内	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の肉	お産の薬	食べるとお産が軽い	阿仁	狩猟習俗調査報告書
熊のナメッコ	下痢止め	普通の糞よりナメコイもの。小腸にたまって肛門までいかない糞。	阿仁	秋田マタギ資料
熊のナメコ	下痢止め	腸の間に入っているやや堅いもの。	大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き
マズ（大腸に詰まっている糞）	ノボセの引き下げ	脂で溶くとクサガサに効く	大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き
クマノジュズ	下痢、産後の後腹病み。岩手では赤痢の妙薬	直腸の糞の詰まったものを燻製にしたもの。	仙北、雄勝、岩手	消えゆく山人の記録　マタギ
ヨドミ（熊の冬眠後最初に出す糞）	腫れ物	紙にのばしてつけると腫れ物に効く	阿仁	消えゆく山人の記録　マタギ
熊の胆、猪の胆、熊のヘダリ（血）	貧血	干す	大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き

	効用	服用の仕方	地域名	出典
猿				
猿の腹兒	婦人病や子どものできない女の薬	細かくきざんで鍋でから煎りしてから煎じて飲む。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
猿のハラゴ	産前産後に効く。	山兎やバンドリのハラゴでも良い。	上桧木内村戸沢	秋田マタギ聞書き
猿のハラゴ	子宮病		大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き
猿の腹子	婦人病	刻んで空いりしてから飲む。		消えゆく山人の記録　マタギ
猿の頭蓋骨	寝小便	乾燥して黒焼きにしたものを飲む。	上桧木内	消えゆく山人の記録　マタギ
カモシカ				
アヲシシ（羚羊）の胃袋	牛馬の薬	八年袋といわれ	阿仁	秋田マタギ資料
アヲシシの角	風邪薬		阿仁	秋田マタギ資料
八年（アヲの胃）	馬の腹病み	干して味噌煮にする。	田沢村玉川	秋田マタギ聞書き
シシのヨドミ	腹病み	味噌で煮て飲ませる。	田沢村玉川	秋田マタギ聞書き
シシの八年袋	牛馬の病気		大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き
ハチネンブクロ（カモシカの胃袋）	馬の腹痛の薬、人間の感昌にも効く		阿仁、仙北、岩手	消えゆく山人の記録　マタギ
アオシシボシ	赤痢	カモシカの生肉を薄く切って干したもので煮て食べる	岩手	消えゆく山人の記録　マタギ
その他				
サンコウヤキ	脳の薬	テン、イタチ、サル、山ウサギの頭を焼いた粉薬。	阿仁、仙北、鳥海、岩手	消えゆく山人の記録　マタギ
ヤマウサギノイラカゴヤキ（山ウサギの胎児）	強精剤	焼いて食べる。	阿仁	消えゆく山人の記録　マタギ
三コウ焼き	高血圧、神経痛、婦人病、血の病の特効薬	サル、イタチ、テンの頭をカメで蒸し焼きにしたもの。または焼いて粉にしたもの。	阿仁	狩猟習俗調査報告書
ウシノイ（牛の胃）	腹痛	乾燥して、削って飲む	上桧木内	消えゆく山人の記録　マタギ
朴の葉と赤飯	犬の傷薬		大阿仁村根子	秋田マタギ聞書き

表４　行商先一覧

地名	行商数	地名	行商数
宮城	64	岐阜	4
福島	51	茨城	4
岩手	32	山梨	4
秋田	22	青森	3
北海道	18	静岡	3
山形	14	愛知	3
新潟	12	愛媛	2
栃木	12	埼玉	2
群馬	5	富 山	1
長野	5	東 京	1
		樺太	1

表５　売薬販売比較

順位	薬品別	順位	薬品別
1	婦人病花柳病	8	牛馬薬
2	胃腸薬	9	鎮痛薬
3	懐中薬	10	脳病薬
4	神経病その他	11	動脈硬化症
5	呼吸器病	12	外傷薬
6	眼病	13	強壮剤
7	内臓		

佐藤正夫「根子部落之概要」より

参考文献

秋田県教育委員会　1964『狩猟習俗調査報告書』
秋田魁新報社　1967『秋田マタギと動物』
阿仁町教育委員会　1970『阿仁マタギの習俗』
阿仁町史編纂委員会　1992『阿仁町史』
伊藤為憲　　1836「鹿角縁起」『秋田叢書３』歴史図書社　1971年
太田祖電、高橋喜平　1978『マタギ狩猟用具』日本出版センター
太田雄治　　1979『消えゆく山人の記録　マタギ』翠楊社
岡見知愛　　1730「六郡郡邑記」『秋田叢書４』歴史図書社　1971年
金子總平　　1942「「マタギ祝ひ」に就いて」『旅と伝説』15－12
上小阿仁村史編纂委員会　1994『上小阿仁村史通史編』
工藤由四郎　1958「阿仁マタギに就いて　　」『出羽路４～５』
後藤興善　　1937「マタギの山言葉」（秋田魁新報連載記事）
菅江真澄　　1785「小野のふるさと」『菅江真澄全集１』未来社　1971年
　　1785「けふのせばのの」『菅江真澄全集１』未来社　1971年
　　1803「すすきのいでゆ」『菅江真澄全集３』未来社　1972年
　　1805「みかべのよろひ」『菅江真澄全集４』未来社　1973年
　　1807「十曲湖」『菅江真澄全集４』未来社　1973年
　　1811「筆のまにまに」『菅江真澄全集10』未来社　1974年
鈴木牧之　　1828「秋山紀行」『日本庶民生活史料集成３』三一書房　1969年
　　1835　『北越雪譜』岩波書店　1982年
成城大学民俗学研究所　1990『昭和期山村の民俗変化』名著出版
高橋文太郎　1936「積雪期における秋田マタギの生活とその印象」『ケルン』
　　1937『秋田マタギ資料』
　　（『日本民俗文化資料集成１』三一書房　1989年）
田口洋美　　1994『マタギ－森と狩人の記録』慶友社
千葉徳爾　　1969『狩猟伝承研究』風間書房
　　1971『続狩猟伝承研究』風間書房
戸川幸夫　　1884『マタギ－日本の伝統狩人探訪記－』クロスロード
富木耐一　　1989「高橋文太郎と武藤鉄城－秋田マタギ調査の双璧－」
　　『日本民俗文化資料集成１』三一書房
野添憲治　　1989『マタギを生業にした人たち』同友社
早川孝太郎　1937「阿仁またぎの山詞その他－秋田県北秋田郡阿仁合谷」
　　『方言』７－１
平瀬補世　　1798「日本山海名産図絵」『日本庶民生活史料集成10』三一書房　1970年
比良野貞彦　1789年頃『奥民図彙』青森県立図書館　昭和48年
文化庁　　1963『狩猟習俗』
武藤鉄城　　1933「雪と民俗　マタギ」『民俗学』
　　1936「マタギの話」（秋田魁新報連載記事）
　　1977『秋田マタギ聞書』慶友社
柳田國男　　1916「マタギと云ふ部落」『定本柳田国男集27』筑摩書房　1970年
　　1926「山の人生」『定本柳田國男集４』筑摩書房　1978年
柳田國男編　1937『山村生活の研究』民間伝承の会
山口弥一郎　1943「秋田及び津軽のまたぎ聚落」『東北の村々』恒春書房